●ホームページ　http://www.greencoop.or.jp/

みどりの地球を みどりのままで

共生の時代

'10 11月

●発行:グリーンコープ共同体理事会　●編集:共生の時代・編集部　●〒812-8561 福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号 カーニープレイス博多4階　TEL092（481）7923 FAX092（481）7876

グリーンコープの輪・和・環

■プロフィール■■■■

大分県生まれ。助産師。現在、福岡県行橋市で医師の夫と産婦人科を開業している。夫、長女（24）、二女（21）、長男（18）の５人家族。グリーンコープ生協ふくおか組合員

食卓から　いのちの尊さを伝えたい

助産師　**内田　美智子**さん

20年ほど前、思春期の子どもたちへ「生」「性」「いのち」「食」のことを中心に生教育の授業をはじめたことが、現在の内田さんの講演活動へとつながっている。子どもたち以外にも保護者や教職員などを対象に、年間100回以上の講演を全国的に展開し、各地で大きな反響を呼んでいる。グリーンコープの組合員を対象にも講演会を行っている。

　1980年、助産師になってから、これまで2500人ものお産に立ち会ってきた。しかし、元気に生まれてくる命だけではなく、この世に生まれて来られなかった命もたくさんあった。命のすぐ側で生と死を見つめてきた内田さんは「女性が一つの命を宿すということは奇跡であり、ここに存在するだけでもすごいことです。生きているうえで起きているすべてのことには意味があり、当たり前のことは何もないんだと毎日思っています」と語る。

　一方で、産婦人科には思春期の子どもたちが妊娠、中絶、性感染症などのトラブルを抱えて来ることも多い。内田さんはそんな子どもたちに10年以上関ってきた。どの子もまともな食事をしていないことが共通していた。食卓の豊かさが子どもたちの心と身体を育んでいることに気が付いた。「そんな子どもたちを何とかしたい」という思いから内田さんの生教育の授業がはじまった。

　講演では「『食』を大切にできない子は『他人の体』も『自分の体』も大切にする事ができません。性教育は、食事のあり方とつながっています」と話す。家庭、学校、地域のあらゆる立場の大人ができることに取り組まなければならないことを強く訴えている。

　内田さんが生まれ育った町の産婆さんは、地域のお産を一手に引き受け、町中の女性のことや各家庭の事情など町のすべてのことを知っていた。子育てや家族計画の相談を受けては「お節介」とも言える世話を焼く。そんな地域に密着した存在に憧れを抱き、「自分もあんな産婆さんになりたい」と助産師への道を志した。

　地域とのつながりが希薄になっている今、母親たちの子育てを支えていきたいと、内田さんは院内で子育て支援のための幼児クラブ「遊Uキッズ」を12年前から主宰している。「お母さんと赤ちゃんができるだけ寄り添って成長していける場を作りたかった」と話す内田さんの根っこは、やはり「産婆さん」だ。「命を懸けて産む者と、命を懸けて生まれてくる者。そんな場に携われる助産師という職業は天職ですね」と話す内田さんの懐は大きくて温かい。

おめでとう！ びん牛乳 誕生7周年!!

Contents

グリーンコープ共済生活協同組合連合会創立総会
協同連帯の輪をさらに広げます　2

うちのメーカー・うちの生産者 ⑫
肥後七草会　冬野菜　3

生物多様性を守る食と農～GMOのない世界をめざして
地球の多様性を祝おう!　4･5

グリーンコープ生協（長崎）西地区
地区組合員総会、スタートしました!!　6

高齢者福祉学習会
笑って元気　地域で高齢者福祉　7

11月中旬から、グリーンコープは「2Rを推進する国会請願署名」に取り組みます

リデュース（ごみになるものを減らす）、リユース（繰り返し使う）を優先する循環型社会をめざします

送信

先日グリーンコープの仲間と人生の最期の時について話す機会があった。

　誰もがいつかは迎える終焉。私たちの世代はぼちぼち親を看取る年代となってきた。自分自身いろんな体の不具合が出てくる年代でもある。予期せぬ最期もあるだろうが、いかに終焉を迎えるか、どのような看取りをするか、家族で話しあう時間を持つことも必要だ。

　今までは自分の死など考えたくもなかったが、大好きだった人たちの死に触れ、それがその時までをいかに大切に前向きに生きるかを考えることにつながると実感している。

　グリーンコープ生協くまもとでは、葬祭事業に関する検討がスタートした。グリーンコープの地域福祉の取り組みの一環として、人の死にまつわるさまざまな課題に対応できるトータルな事業をめざすものだ。安らかな終焉の一助となれたらと願っている。

グリーンコープ生協くまもと副理事長　前田　博子

協同連帯の輪をさらに広げます

2010年10月6日、福岡市にて、グリーンコープ共済生活協同組合連合会の創立総会が開催されました。グリーンコープ14単協の組合員・職員など約100人が参加して総会は行われました。これから法人の登記を経て正式に設立することになります。

同日、創立総会終了後には、約300人の組合員・職員が参加して、記念シンポジウムも行われました。

創立総会と記念シンポジウムのようすを報告します。

発起人代表として挨拶する
グリーンコープ連合専務理事片岡宏明さん

37人の役員予定者を代表して
挨拶するグリーンコープ連合会長
田中裕子さん

グリーンコープ共済連創立総会

災害にあった組合員をみんなで支えたことがきっかけではじまった、CO・OP共済。生協がめざす助けあい・支えあいのしくみとして全国の生協の組合員に支持されてきました。

1995年、地域福祉に本格的に取り組むにあたって、グリーンコープはCO・OP共済の取り扱いをはじめました。2005年には、共済事業を日本生活協同組合連合会と共同で引き受け、共済の加入・給付の手続きだけでなく、掛金や給付の責任も折半して担ってきました。

その後、2008年の生協法の改正を受けて、CO・OP共済の共同元受事業を行う主体としての組織、「グリーンコープ共済生活協同組合員連合会」設立の準備を進めてきました。

発起人を代表して片岡さんより、「契約者保護という今回の生協法改正の目的を踏まえながら、組合員どうしの顔の見える助けあいという考え方を大切にしながら、この新共済連をさらに安心で豊かな地域社会づくりのために運営していきたいと思います」と挨拶がありました。

続いて、議長など総会運営委員が選出されました。臨席いただいた来賓10人を代表して、厚生労働省消費生活協同組合業務室室長補佐の長谷部哲さん、生活クラブ共済事業連合生活協同組合連合会会長の福岡良行さん、パルシステム共済生活協同組合連合会理事長の若森資朗さんの挨拶がありました。

定款設定や三ヵ年事業計画、役員選任など第1号から第10号議案までの提案・審議が行われ、すべての議案はグリーンコープの14単協とグリーンコープ連合の代議員15人の満場一致で可決されました。

新役員紹介の後、役員を代表して田中さんは、設立趣意書の最後の段落を読み上げ、「数年後に共済連を設立してよかったねと喜びあえるようにがんばっていきたいと思います」と挨拶しました。

グリーンコープ共済生活協同組合連合会
－設立趣意書－

CO・OP共済は、全国の生協組合員の「助け合い」を形にした事業として、1979年に開始されました。その後、CO・OP共済《たすけあい》を中心に、全国の生協とともにグリーンコープ連合および会員生協が共同事業として取り組みをすすめ、13万人、全国では660万人を超える加入者の輪になっています。

組合員の暮らしは、年金や福祉等の社会保障制度の問題や雇用不安、地域・所得格差などの大きな変化に直面しています。グリーンコープ連合では食の分野において安全・安心を目指すために《トレーサビリティ》を大切にし、福祉分野では社会的役割を十分に発揮し、安心で心豊かな社会づくりに貢献していますが、共済や保険の分野においても、よりよい保障商品を提供すること、公正な事業を行うことを通して、組合員のくらしの保障やくらしの課題解決に役立ち続けることがますます求められています。

私たちは、大きく変わる情勢の中で、今まで以上に加入者の利益向上と社会的責任を果たし、グリーンコープ独自の「助け合い」事業の一翼を担っていく為に、日本コープ共済生活協同組合連合会と連携して、グリーンコープ共済生活協同組合連合会を設立します。

私たちは、改正生協法の契約者保護を図る観点を真摯に受け止め、共済事業と他の事業とのリスク遮断を行い、CO・OP共済に取り組むグリーンコープ連合の会員生協が共に出資し、共同事業の場であるグリーンコープ共済生活協同組合連合会に結集します。また、日本コープ共済生活協同組合連合会と連携しながら、加入者の立場に立った事業運営、及び健全経営に徹することを基本に据え、グリーンコープ独自の保障事業を創造して保障事業に取り組むことを決意します。

私たちは、「4つの共生」（自然と人・南と北・人と人・女と男）を理念とし、協同連帯の輪をさらに広げます。より多くの組合員の参加と社会に開かれた運営を実現します。また、私たちは保障事業を通して、社会的役割を十分に発揮し、安心で心豊かな社会づくりに貢献することを目指します。

2010年10月6日
グリーンコープ共済生活協同組合連合会　設立発起人会

記念シンポジウム

「経済に君臨し、支配する『資本主義』の誕生と、それが超えられていく方向について」をテーマにした行岡顧問の講演と「世界経済のサンアル、『喜悲籬場（きひりじょう）』を提案する」をテーマとした金芝河（キムジハ）詩人の講演の後、「女性の判断力、創造的感覚こそが『喜悲籬場』の主役」というテーマで組合員を代表して3人の理事長が参加したパネルディスカッションが行われました。

「経済に君臨し、支配する『資本主義』の誕生と、それが超えられていく方向について」

講師 行岡良治さん
社会福祉法人グリーンコープ理事長。グリーンコープ共同体顧問。(株)コークス調査研究所社長

「人類の誕生から共同体を形成していく過程での意識空間の広がりや、農業革命からルネッサンス、近代市民革命という人類の歴史を紐解きながら、資本主義を超える道は『公のものを公に返していくこと』にある」という提言がありました。

「世界経済のサンアル、『喜悲籬場（きひりじょう）』を提案する」

提案者
金芝河（キムジハ）詩人

本名は金栄一（キムヨンイル）。韓国の思想家・詩人。民主化運動の指導者。2008年に「アジア民衆福岡寄り合い国際会議報告会」で「互恵を前面に、交換を日常に、再分配を準備して」と題する講演を行い、アジア民衆基金立ち上げに寄与した

金芝河詩人は事情により参加していただけなかったため、当日は東原さん（グリーンコープ共同体専務理事）が講演原稿を代読しました。

喜悲籬場とは、韓国の互恵市場（五日市）のことを表す。単に商取引をする市場ではなく、人々の喜びと悲しみがある、そういう空間を提案している。市にあふれる人と人との心をどのように通いあわせるか、それに互恵という考え方をあわせて、「画期的な再分配」をどのように実現すべきかの提案がありました。

－パネルディスカッション－
女性の判断力、創造的感覚こそが「喜悲籬場」の主役

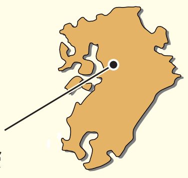
パネリスト（右から）
田原幸子さん（グリーンコープ生協ふくおか理事長）
林和子さん（グリーンコープ生協ひろしま理事長）
田中裕子さん（グリーンコープ共同体代表理事）
行岡良治さん（グリーンコープ共同体顧問）
金起燮（キムキソプ）さん（韓国のドゥレ生協連合会常務理事）
コーディネーターの東原晃一郎さん（グリーンコープ共同体専務理事）

お二人の講演内容を受けて、金芝河さんの思想とグリーンコープ運動にも深い理解のある韓国のドゥレ生協連合会の金起燮（キムキソプ）さんより、グリーンコープの4つの共生は人類の歴史の中でその時々に一番大切な問題意識だったのではないか、その上で「お金と心の融合」という新たな提案を受け止めていきたいとの発言がありました。

シンポジウムの提案の中心である「喜悲籬場」について、「その『籬』はグリーンコープそのものではないか」、「そこで展開される画期的な再分配には女性の感性や判断力こそが生かされるのではないか」などについて、意見交換がなされました。

うちの生産者 102

熊本県宇城市
肥後七草会



うちのメーカー

肥後七草会

青々と育つベビーリーフ

熊本県宇城市松橋町にある肥後七草会では、温暖な気候を生かして冬野菜のブロッコリー、白菜、春菊や、みかん類、ぶどう、赤とんぼ米、トマト、いちごなど、年間を通して多数の品目を栽培しています。

肥後七草会の代表を務める松村和則さん（グリーンコープ青果生産者の会 副会長）をはじめ、緒方道弘さん、山川太陽さんに話を聞きました。

肥後七草会のみなさん

肥後七草会は、熊本市の南側に隣接し、水と緑豊かな環境に恵まれた宇城地域にある。降雪の少ない温暖な気候と、八代海（不知火海）に面した干拓地のミネラルを多く含んだ土壌を生かし、20種類以上の作物をできるだけ農薬を使わずに栽培している。

1977年、全国有機農業研究会の大会に参加した生産者が、「これからは有機農業を行い、消費者に安心・安全な食べものを供給する農業をやろう」と決意。1978年3人ではじめた。翌この頃からグリーンコープの前身生協との取り引きがはじまった。「農薬を散布する自分自身が一番の危険にさらされている」と気付いたメンバーは、「わが家の健康、人々の健康を考えた野菜や果物作りがしたい。次世代を担う子どもたちに安全なものを食べてもらい、本当の食べものと、そうでないものが分かる人になってもらいたい」という思いから、減農薬から無農薬栽培へと農薬を減らす努力をずっと続けている。

当時は「竹の子会」というグループ名で、ぶどうやみかん類、れんこんを無農薬で作っていた。生協の発展と共に注文数も増え、メンバーも増えた。しかし、考え方の違いからグループが分かれ、1989年「肥後七草会」として7人のメンバーで再出発した。

左から松村さん、山川さん、緒方さん

現在メンバーは25人。ぶどう部会、みかん部会、果菜部会、葉茎・根菜部会、米部会、婦人部会の6部会で構成している。「出荷している品目が多いので、部会ごとに分かれて研修や勉強会などを行っています。わが家はみかん以外の作物を作っているので5部会に入っています」と松村さん。

毎月1回行っている定例会は、七草にちなんで7日の日に全員が集い、行事の報告や勉強会などを行っている。各部会では出荷する作物の大きさ、重さ、形などを協議して、今年の作柄に合わせる目合わせを行ったり、メンバーの圃場を見学しながら栽培方法の工夫など情報を共有している。

恵まれた環境を生かして

現在、肥後七草会では、ベビーリーフ、トマト、みかん類が全体の出荷量の多くを占めている。夏は涼しい山手で、冬は温暖な平地で作物を作っている。これからは冬野菜の白菜、ブロッコリー、春菊などが本番を迎える。そのほかジャンボにんにく、いちごなどの植え付けも行っている。今年は新規で小さな大根とカリフラワーの栽培に取り組む。

カリフラワーは栽培が難しく、7年ぶりにグリーンコープのカタログに登場する予定だ。「肥料を多く与えないといけないので加減が難しいんです。土の中の栄養分が欠乏すると葉が開き、玉が紫外線を浴びて黄色に変色して、出荷できなくなるんですよ」と緒方さんは言う。

12月に出荷する予定のサラダ用玉ねぎを作っている松村さんは、「一般的な玉ねぎ作りとは違い、苗ではなく球根を植えて太らせます。機械は使えないので20万個を全部手作業で植えました。糖度の高い品種で甘くて美味しいですよ～」と笑顔で話す。

安心・安全で美味しい作物を食べて欲しい

農薬を減らして美味しい作物を作るためには土作りが基本だ。肥後七草会では、土壌検査をして、農地ごとに環境に合わせた土壌改善を行っている。「検査結果で肥料を選び、土壌のバランスを整えています。そうすることで、品質を落とすことなく農薬を減らすことが可能になり、より安心でおいしいものを作ることができます」と緒方さん。害虫予防には、虫が付きにくい肥料を選んだり、でんぷんや牛乳を作物に撒いて害虫を窒息させるなど、できるだけ自然なものを使いながら、安心・安全な作物を追及している。

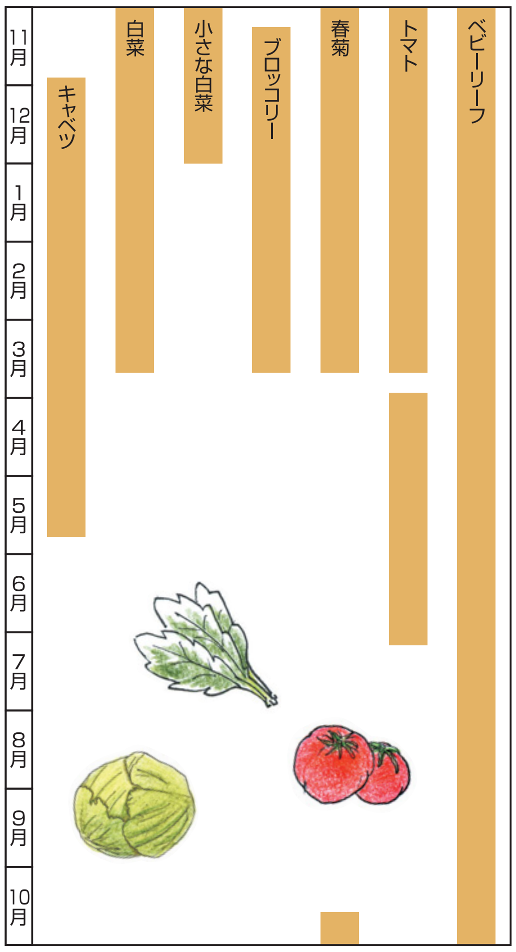
グリーンコープの野菜・果物栽培は、原則除草剤を使用しないので除草は全て手作業だ。「農作業で一番大変なことは草取りです」と話す山川さんは、急傾斜のみかん畑を手作業で除草している。「生えては刈って、また生えては刈っての繰り返しです」と笑いながら話す。

こういった努力にもかかわらず、今年の夏野菜・果物は、7月に植え付けたものが長雨や日照不足による影響で、今までにない不作が続いた。昼夜の温度差で色づくぶどうは、熱帯夜続きと日照不足で色づきが悪く、質のいいものはできなかった。「虫の活動や発生も異常だった」。松村さんたちは、急激な環境の変化を肌で感じている。

大地の恵を味わって欲しい

山川さんは「最近は若者のフルーツ離れが進んでいます。子どもたちにはジュースや缶詰などではなく、指を使い、皮を剥いて食べる美味しさを知って欲しい」。「作物は手を掛けた分だけ美味しく育ってくれる。機械ではなく、一つひとつ丁寧に手で作ったというところに価値があると思っています」と松村さんも胸を張る。肥後七草会は人間にとっての作りやすさではなく、野菜自らが美味しく育つ自然に近い環境づくりをめざしている。

肥後七草会の主な栽培品目と出荷期間



農～

い世界をめざして

様性を祝おう！

2010／10／10～11
in名古屋

２００９年５月、遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーンの呼びかけで、生物多様性を考える市民ネットワーク（ＭＯＰ５市民ネット）が設立。日本で行われる第10回生物多様性条約締約国会議（ＣＯＰ10）とカルタヘナ議定書第５回締約国会議（ＭＯＰ５）を照準に活動してきました。

２０１０年10月11日から、名古屋市にてＣＯＰ10／ＭＯＰ５が開催されました。ＭＯＰ５市民ネットは同市にて10月10日、プレイベントとして「生物の多様性はすばらしい・祝おう」をコンセプトに屋外イベントやパレードに取り組みました。翌11日には、フォーラムを開催し、遺伝子組み換え（以下ＧＭ）に反対する国内外の専門家や活動を共にする人々と報告会やパネルディスカッションを行い、ＭＯＰ５市民提言を採択しました。

屋外イベントには延べ６０００人、パレードには約１０００人、フォーラムには３００人以上（グリーンコープからは各単協の理事長他22人）が参加し、熱気あふれる取り組みとなりました。

プラネット・ダイバーシティ・フォーラム

「生物多様性問題、ＧＭ問題は、近代以降の市場経済優先の考え方から生まれてきた問題と言える。これは、現代社会の根本的な問題だ。地球上のすべての生物は互いに助けあって共存している。このように価値観を変えていかなければならない。それは、文明の転換をも意味している。ＭＯＰ５の作業部会が、そうした観点に立って、最大の成果を挙げることができるように、市民ネットはバックアップしていきたい」と高山進さん（生物多様性条約市民ネットワーク共同代表）が挨拶。続いて国内スピーカーや海外ゲストによる報告が続いた。多くの科学者や活動家が国内外で、力強くＧＭ問題を研究・活動している。

「遺伝子組み換え技術の基本的問題点」金川貴博さん（京都学園大学）、「遺伝子組み換えナタネ自生問題」河田昌東さん（遺伝子組み換え情報室）、「自生調査から見えること」八田純人さん（農民連食品分析センタ

ム）、「韓国のＧＭＯ反対生命運動連帯の活動」イ・ジェウクさん（韓国・生協連合事務総長）、「韓国のＧＭＯ表示制度について」イ・スニルさん（私たちの農業再生運動本部ウリノン）からは、日本の生協と連携しながらのＧＭＯ運動についてや韓国でのＧＭ問題の現状について報告があった。

ジュリー・ニューマンさん
オーストラリア「憂慮する農民連盟」の全国スポークスマン。西豪州に夫と1万haの農地を所有、種子会社も経営。豪州穀物協議会の政策協議会メンバー。

ジュリー・ニューマンさん

西オーストラリアでは、多国籍企業のモンサント社が政府の研究機関などに資金を援助し、協力関係を作っている。政府は２００３年モンサント社の検査結果のみでナタネのＧＭ種子を認可した。小麦や大麦もＧＭの認可の方向。モンサント社の戦略は在来種を市場

デビット・クイストさん

環境に配慮した農業を行っている地域の依頼で、ＧＭ汚染がないことを証明するために検査を行った。しかし、山奥で採取されたト

も安定して得ることができるということは、その作物の遺伝的多様性による。北米との自由貿易協定によりＧＭトウモロコシなどが自由に入るようになったことから起こった現象。他でも同様のことが起こり得る。農家はＧＭ種子であるかどうか見分けることはできず、

講演　遺伝子組み換え作物を容認してしまえば、拡散を止めることはできない

講師パーシー・シュマイザーさん

1996年カナダ政府はGMを認可。GM種子を使えば収穫は増え、農薬を減らすことができ、栄養価も高くなり、持続可能な農業で世界の飢餓に貢献できると、モンサント社はアピール。しかし、実態は全く逆であった。GM作物であることから価格は下がり、栄養価は有機農産物の50%、農薬の使用量は４～５倍。使用しはじめて一年で農場のあちこちにスーパー雑草が育ち、駆除にもコストがかかる。しかも、GMを使用した農場と何キロにも及ぶ緩衝地帯を作っても、風や虫や鳥や人などの媒介による汚染を防ぐことはできない。

私はカナダで自家栽培した種子で品質のよいナタネを栽培、安定した農業を営んでいた。ところが、知らない間にGMナタネが農場の片隅に自生していたことから、契約をしたことがないのにモンサント社に種子の使用量の請求を受けた。裁判の結果、いかなる理由であれ、２%以上モンサント社の品種があれば特許侵害にあたり、種子も収穫物もすべてモンサント社のものであるという判決となった。自分たちで育生した種子が認められず、農家はナタネを栽培しようとすると必然的にGM作物を栽培せざるを得ない状況が生まれるのだ。世界の多くの農家がこの問題で苦しんでいる。日本はまだ、選択の余地が残されている。GM作物の栽培を阻止しなければ、農業は種子と食料の独占を狙うアグリビジネスの思うままになってしまうのだ。

パーシー・シュマイザー：カナダの農家。モンサント社を相手に裁判闘争を行う

パネルディスカッション

自生ＧＭナタネ汚染調査の取り組みのようすと成果

田原さん　　奥田さん

・コーディネーター
天笠啓祐さん（ＭＯＰ５市民ネット共同代表）
・パネリスト
石川豊久さん（遺伝子組み換え食品を考える中部の会）
田原幸子さん（グリーンコープ生協ふくおか理事長）
奥田富美子さん（グリーンコープ生協おおいた理事長）
赤堀ひろ子さん（生活クラブ生協連合会）
小林和子さん（生活クラブ生協エスコープ大阪）

天笠　ナタネの自給率が限りなく０%に近い日本では、海外に輸入依存せざるを得ない。輸入されているナタネのほとんどがＧＭナタネ。輸入港から製油工場などに輸送する過程でこぼれたＧＭナタネが自生している状況が、現在各地で見られている。ＧＭナタネの自生調査は、６年という調査期間や規模において世界でもまれな市民による科学調査といえる。

奥田　２００５年、初めての自生ＧＭナタネ調査で自生があることを知って、ＧＭ食品を食べなければいいという問題ではないと実感した。ＧＭ問題をアピールするためにＧＭＯフリーゾーンと書いたガーデンピックを作り、家庭菜園などに設置するように販売し、売上げの一部で生産者の畑に看板を立て、多くの人に知ってもらいたいと思っている。

田原　自分たちの地域のようすを知ろうと２００５年からＧＭナタネの自生調査をはじめた。ナタネの輸入港である博多港周辺にＧＭナタネの自生が非常に多い。調査５年目には組合員によ

る「自生ＧＭナタネ抜き取り隊」を立ち上げ、取り引きメーカーや生産者、地域の市民団体などにも呼びかけた。行政や製油メーカーにも、ＧＭナタネの飛散を防ぐ手立てを講じるように申し入れをしている。

石川　２００４年、農水省が茨城県鹿島港でＧＭナタネ自生を報告。ＧＭ汚染を心配して調査をはじめた。調査の度に多年草化、他種との交雑など問題は大きくなっている。花火の材料にナタネを使用しているものもあり、現状は収拾がつかない状況になっていると思う。

小林　自分たちだけの問題に終わらせないように、取り組みを広げていくことが大切。韓国の大学などにも呼びかけ、調査を広げることができた。

赤堀　１９９６年に日本がＧＭ食品の取り扱いを認可。１９９７年から表示運動などに取り組んできた。自生調査も２００５年から取り組んでいる。日本の自然環境を守るためにはＧＭ汚染を意識する市民の目が必要だ。より多くの人に知らせていきたい。

的加工品の特長が失われることになる。こうした問題

の人々にとって主食の問題。多くの零細な農民が、多国

名古屋市内を「遺伝子組み換え NO!」とアピールするグリーンコープからの参加者

生物多様性を守る食と農 GMOのない 地球の多様

ネイティブアメリカンの住居のモチーフを緑の風船で飾る、当日の取り組みのシンボル

さくらドロップによる「青空ライブ」

遺伝子組み換え中部の会のブースでは「自生ナタネの調査活動」などが紹介されていた

MOP5市民提言

提言1:カルタヘナ議定書第27条「責任と修復」補足議定書を被害者と環境を真に護る国際制度に

1. 予防原則（慎重原則）によるリスク管理にもとづいた国際制度を求めます。
　この原則は、公害病やアスベスト被害など過去の教訓から学び、危険性について科学的に証明されてない場合でも、あとで取り返しがつかない被害を出さないよう、念のために対策を取るという原則です。LMOによる過去の過ちを繰り返さないために不可欠の原則です。
※LMO－人間が操作して作る生命操作生物。遺伝子組み換え生物に細胞融合生物を加えたもの
2. 対象物質として、LMOのみならず、LMOおよびその生成物を含めることを求めます。
　近年、現実の被害はLMOそのものだけでなく、その生成物によって間接的に起きる可能性があることを示す科学的知見が発表されています。
3. 事業者の定義を広範囲の事業者を含むものにすることを求めます。
　LMOの国境を越える移動には、様々な事業者が関わります。汚染者負担の原則にもとづき、製造物責任法（PL法）同様、損害の直接の原因となった事業者（その多くは中小の零細企業や農家）だけでなく、損害の原因になったGM種子などのLMO開発メーカーや販売業者にも修復・賠償義務を課す必要があります。
4. 民事賠償規定を補足議定書に明記することを求めます。
5. 損害を発生させた事業者は、故意や過失がなくても、賠償責任を負うという無過失責任（厳格責任）を基準とすることを求めます。
6. 財政的保障制度を明記することを求めます。
　開発、販売以外の事業者のほとんどは中小企業であるため、賠償能力がありません。このため、加害事業者の倒産に備えた基金や保険の義務付け、被害者が泣き寝入りを強いられないような制度にすることが不可欠です。

提言2:カルタヘナ国内法の改正

1. GMナタネの自生、野生化、交雑に見られるように、GM作物による生物多様性への制御不能な事態に歯止めとなる仕組みを求めます。
2. 現国内法ではGM作物がもたらす生物多様性に対する環境影響評価を交雑可能な近縁の野生植物に限定していますが、人間の健康や農作物を含めた、あらゆる生物への影響を評価し、また、GM作物導入にともなう農法の変化、使用する農薬やその散布の方法の変化、モノカルチャー化の進行がもたらす影響も評価することを求めます。
3. 現在の農水省の指針に基づく交雑防止のための隔離距離を抜本的に見直し、北海道の試験結果をふまえ、花粉の寿命を考慮した隔離距離を設定することを求めます。
4. 北米でGM鮭が開発されるなど、GM動物の種類も数も増え続けています。これまで大学などで繰り返し起きてきた、GM動物逃走などのカルタヘナ国内法違反をなくすよう、規制を強化するとともに、動物の福祉に配慮する形で、国内法の改正を求めます。
5. これまでクローン動物は、LMOから除外されてきましたが、クローン技術は生物多様性と真っ向から対立する技術です。この技術をLMOの中に含めることを求めます。
6. 参議院で採択されたカルタヘナ国内法附帯決議を速やかに実施することを求めます。

ー）、「遺伝子組み換えナタネと交雑問題」生井兵治さん（元筑波大学教授）。GMに関する多岐に渡る問題点が指摘された。

海外のゲストからの報告

「GMOフリーゾーン運動韓国の状況」パク・チュニョンさん（原州ハンサリ

からなくすことだ。契約すれば、農民は主体的な農業経営をする権利を失ってしまう。

デビット・クイストさん
ノルウエー「憂慮する科学者連盟」メキシコの野生トウモロコシにGMトウモロコシの遺伝子が含まれていることをはじめて発見した科学者

ウモロコシからGM遺伝子を発見。メキシコ人にとっては、トウモロコシがなければ何もはじまらないと言える食物。遺伝的多様性の損失の可能性を意味している。伝統的にその土地にあった作物で、その地域の食生活にもマッチし、収穫量

クレア・ウエストウッドさん

汚染を止めることはできない。GM作物から作られる食品もGM汚染されていることになり、文化的、伝統

が起きないようにあらゆる方策が必要だ。

クレア・ウエストウッドさん
マレーシアに本部がある「農薬行動ネットワーク　アジア太平洋」に属し、GM作物、特にイネの問題を追及している活動家

イネのGM問題はアジア

籍企業によるアグリビジネスによって蹂躙（じゅうりん）され、経済的文化的自立性を失い、消費者は選択権を失う。国や民族の壁を越え、生産者と消費者の連帯が必要だ。

生物多様性条約及びカルタヘナ議定書とは

生物多様性条約

　地球環境の悪化が叫ばれはじめた1992年、地球環境サミットがブラジルで開催され、国際的な取り決めとして「持続的発展のための地球行動計画＝アジェンダ21」が採択された。同時にラムサール条約やワシントン条約などの特定の地域、種の保存の取り組みだけで生物多様性の保全を図ることができないとの認識から、新たな包括的な枠組みとして自然の生態系の保護を目的とした「生物多様性条約」が成立した。その条約の3つの目的は、
・地球上の多様な生物をその環境とともに保全する
・生物資源を持続可能であるように利用する
・遺伝資源の利用から生ずる利益を公平かつ公正に分配する

カルタヘナ議定書と争点

　生物多様性条約に基づき、バイオテクノロジーによって操作された生物（GMO）が環境に悪影響を及ぼさないように管理するための措置を講じるための国際間の取り決めである「カルタヘナ議定書」が作られた。2003年に日本はこの議定書を締結し、2004年国内法が施行された。

　カルタヘナ議定書の中で、最大の懸案は27条「責任と修復」の条項。「改変された生物の国境を越える移動から生ずる損害について、その責任と救済の分野における国際的な規制及び手続きの方法を発効から4年以内に制定する」ことが記載されていた。しかし、4年後の2007年、合意することができず、その後も合意に至っていない。名古屋でのCOP10／MOP5が最後のチャンスと言われている。

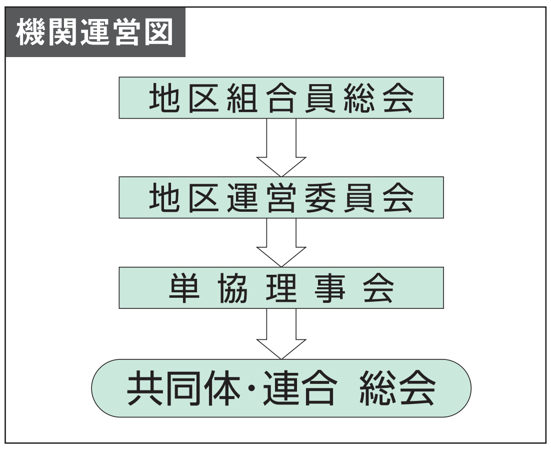
　争点となっている条項「責任と修復」は、輸出国から来たGM作物などがGM汚染をもたらした際に、輸入国がどこまできびしく責任を追及でき、修復なり賠償責任を求めることができるかについてだ。GM技術に関しては開発企業がモンサントなど6社、主要な輸出国がアメリカ・ブラジル・オーストラリア・カナダ・アルゼンチンの5ヵ国（ブラジルを除き議定書の締約国ではない）で、性質は除草剤耐性と殺虫性の2種類。日本は、締約国であるにもかかわらず輸出国を代弁するような行動をとってきた。今回の名古屋会議の議長国である日本のリーダーシップは参加各国の注目するところだ。

地区組合員総会、スタートしました!!

――グリーンコープ生協（長崎）西地区――

グリーンコープ共同体設立の根幹のテーマは「組合員主権」を貫くことにあります。その実践の大きな柱の一つに掲げられている地区組合員総会。グリーンコープ共同体になって4年目の2010年度は、11単協で開催されるまでになりました。
グリーンコープ生協（長崎）は、2010年秋、初めての地区組合員総会に取り組みました。9月22日に行われた西地区の組合員総会のようすを紹介します。

あたたかい雰囲気ではじまった長崎西地区組合員総会



総会を終えて、ホッと笑顔のスタッフ

地区組合員総会とは

生協は、組合員が「出資」「利用」「運営」をしてつくり上げていく組織だ。戦後の1948年に、日々の暮らしの全般にわたって、思いを寄せあい、力を合わせてみんなの暮らしをよりよいものにしていくために行動することを目的に設立された生活協同組合。そのことを理念だけでなく、制度としても保障する仕組みが消費生活協同組合法（生協法）だ。生協法では、年に1回総会を開くことが定められている。組合員が100人以上の生協では、組合員から選ばれた総代が決議を行う「総代会」が最高の議決機関。

総代会が一番大切な決定機関であるということは、その決議を行う「総代」をきちんと地域の組合員から選出することが組合員のもっとも大切な権利であり、義務になる。組合員全員が参加することはなかなか実現できるものではないが、「総代の選挙権」を尊重し、名実ともに発揮できるようにしていくために、その地区の総代を組合員の総意で選出していく「地区組合員総会」は重要な役割を担うことになる。

はじめての取り組み

長崎市中心部をエリアにする西地区は、組合員数1033人。これまでも地区の組合員を対象に試食や商品紹介など交流を深めるグリーンパーティを開催しながら地域に密着した活動を行ってきた。昨年はそのグリーンパーティを「プレ地区組合員総会」に置き換えて開催し、今回の本格的な組合員総会に備えた。

この日、はじめての「長崎西地区組合員総会」では、この1年間の活動が報告され、総代選挙が行われた。はじめて参加した組合員からは「商品を利用するだけだったけど、グリーンコープは自分の見えないところでたくさんの人が動いていることを知ってびっくりしました」との声も寄せられた。

あたたかい雰囲気で

丁寧な準備をすすめてきた（長崎）地区会のスタッフメンバーだが、はじめての地区組合員総会を開催するにあたり、多くの不安を抱えていたのも事実だ。

会場になった施設はカセットコンロなどの火器の持ち込みができない。試食の商品はそのまま味わってもらうしかない。参加したメーカー福留ハム副工場長宮崎さんのアドバイスを受けながらの試食は参加した組合員に大好評。にぎやかな試食会になった。

ベーコン・ソーセージ・食パンなどの試食に「やっぱり、おいしいね」と会話もはずむ

市販のハム・ソーセージに使われる添加物サンプルの多さに驚く組合員

商品の説明や添加物の話を聞きたいと参加した組合員は、メーカーに組合員の声が届けられ、こだわりの商品ができていく過程を知り、安心感をさらに強いものにした。はじめて参加する組合員にとって、こだわりの商品をとおしてグリーンコープの取り組みが見えてくることは明らかだ。

総会の途中、赤ちゃんを連れた組合員がぐずる赤ちゃんに手を焼いていると、スタッフが声をかけ赤ちゃんを抱いて会場を出た。戻ってきた時には赤ちゃんはスタッフの腕の中でぐっすり。託児の年齢に達していない赤ちゃんを連れて参加した組合員も安心できる空気が流れた。

これからに向かって

利用する組合員が出資者であり運営者であることを実現するには、グリーンコープの活動・運動・事業の決定に地域組合員がかかわり地域に根ざした活動の基盤をつくることが、はじめの一歩となる。組合員が真の主人公として登場し、組合員一人ひとりの意志を代表する総代を選出する組合員総会は、グリーンコープがより地域に根ざしていくため、グリーンコープの求める共生のかたちそのものだ。

はじめての組合員総会を終えた理事や委員の表情は、安堵と達成感に満ちていた。「組合員さんが集まるかどうか不安だったね」「司会もなんとか失敗なくてよかった」と、会場の片づけをしながら本音が出る。「でも、これからね。また、次に向かって頑張ろう」。参加した18人の組合員の意思を受け取った、活動に携る組合員はもう次のステップへの階段を登ろうとしている。

報告

口蹄疫の緊急カンパは有効に活用されています

2010年10月5日、綾豚会よりカンパ金の使途について報告をいただきました。
10月21日には、グリーンコープ生協みやざきの杉尾理事長から宮崎県綾町の前田穣町長へ口蹄疫防疫義援金としてカンパ金の一部をお渡ししました。

・宮崎県綾町へ口蹄疫防疫義援金	5,671,762円
・綾豚会会員の各農場の消毒ゲート代	11,234,320円
・綾豚会会員の見舞金	4,200,000円
・綾豚会で負担した消毒費用	3,280,457円
・出荷制限で長期肥育となった豚の保管料等	2,015,329円
計	26,401,868円

口蹄疫は、8月27日に終息宣言が出され、宮崎県内は再建に向けてようやく落ち着きを取り戻しつつありますが、時間の経過と共に口蹄疫が宮崎県に与えた影響の大きさを感じています。現在、今回のご支援に対して各単協様へお礼の訪問をさせていただいていますが、皆さんからのお言葉に改めて勇気と感動をいただいています。今回の口蹄疫は、私たち畜産農家に衛生管理をはじめとする畜産経営のあり方を問う災害であったと考え、二度とこのようなことのないように努めることがグリーンコープの皆さんへの恩返しだと思っております。本当にありがとうございました。

農事組合法人綾豚会　代表理事　押田明

高齢者福祉学習会
グリーンコープ共同体
福祉委員会

笑って元気
地域で高齢者福祉

9月22日、グリーンコープ共同体福祉委員会主催の高齢者福祉学習会が、福岡市で開催されました。

講師の矢野大和さんの大分弁を交えた話に、会場はしばしば爆笑の渦に包まれました。参加した組合員は、元気をもらったように、学習会が終わるとみなすっきりとした笑顔でした。

講演は、お年寄りの日常にまつわる話から、親子、嫁姑の話題など、生活の中のありふれた光景がユーモアあふれる視点で切り取られていました。要旨を紹介します。

やのたいわ
矢野大和さん
元大分県宇目町職員。宇目町の「観光大使」として全国各地で「口演」と題し活動を行う。2007年からフリー。NPO法人全国生涯学習まちづくり協会理事。大分県文化振興県民会議委員

笑顔の声かけがエネルギーの源

お年寄りが元気でいるために大事な3つの要素があります。

①笑いがある。

②「あんたがおらんと困る」と言われている。

③「また会いたいですね」と言われている。

つまり、コミュニケーションが一番のエネルギーの源なのです。地域の人が互いに笑顔で挨拶を交わし、「おばあちゃん、何かあったら言ってくださいね」と日ごろから声かけすることが、一人暮らしのお年寄りの元気につながります。

しかし現在、地域のコミュニケーション不足が問題となっています。犯罪が起こる度にメディアが大きく取り上げ、他人同士が声をかけにくい世の中になっています。世間の人々の多くが罪を犯すわけではありません。それよりもコミュニケーション不足が犯罪を招くことのほうが問題です。孫と祖母との会話不足などが原因で、振り込め詐欺が多発しています。気持ちは言葉にしないと伝わりません。少しずつ声をかけあうことからコミュニケーションが生まれ、そこから信頼関係が生まれるのです。

人生の冬を知っている人

ある地方のみつばちは、冬がなくずっと花が咲いているところでは蜜を集めなくなるそうです。長い冬があるからこそ、それに備えてせっせと蜜を集めるのかもしれません。今の日本はずっと春が続いている平和な世の中です。人生には冬、つまり厳しい時代を知ることも必要です。今のお年寄りは戦争など人生の冬を経験し、人間としての幅も深みもあると思います。冬を知っている人たちがまだまだ生きているのはありがたいことです。

しかし、厳しい冬を知っているからこそお年寄りは、老後への不安からたくさんの貯金を持っていると言われています。年をとって体が不自由になっても、物忘れが激しくなっても、家族でなくプロによる老後の福祉が保障されていれば、必要以上にお金を貯め込まずに済みます。お金の流れが滞ると、経済は停滞します。福祉の充実が急務です。

笑いが途切れることのない会場。大分弁の小気味良いテンポでの「口演」にみな引き込まれた

「あんたがおらんと困る」

もし年をとっても元気なら、地域に貢献してもらうことが、生きる力になります。お年寄りを元気にする一番の福祉は、「まだすることがありますよ」と言ってあげることです。何か一つ得意技を持ち、それを活かしている人はいきいきとして元気です。人に喜んでもらうことが生きる力になり、老後の生きがいになります。

私の知り合いに、炭焼き名人の93歳のおじいさんがいます。道の駅でオリジナルの製品を販売しています。人気が高く、すぐに他のお店で類似品が出回り、売り上げが落ちてしまいました。でもそのおじいさんはちっとも気落ちしません。「また何か考えればいいがや」と楽天的です。めげずに何度でも違う製品を考え出し、「こげぇに忙しいと病気しとる暇がねぇ」とすこぶる元気です。必要とされることがエネルギーになっているのだと思います。やはり「あんたがおらんと困る」の一言が大事です。

誰もがどこかで役に立っているという社会が、元気な社会です。それぞれにできること、できないことがあり、話しあうことで分業は成り立ちます。

別れる時は「また会いたいですね」

生涯いろんなことに挑戦し、学習を続けている人は、魅力的です。いろいろな体験をし、価値観が違う人の話を聞き、それまでの自分と違う自分に出会っているからだと思います。そんな人には「また会いたい」と思います。別れる時はお互い、「またぜひお会いしたいですね」と心を込めて言いたいものです。「また会いたい」という言葉は、相手に力を与えます。明日もまた元気で頑張ろうというエネルギーの元になります。

元気で活躍できる地域をつくることが、お年寄りが日々笑って暮らせることにつながると思います。

No.28

原子力発電所が抱えた生命を脅かす危険

1986年旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所が、大事故を起こしました。2009年の報道によれば、今でも死者の数は増え続けています。事故処理に駆り出された2万5千人以上の作業員たちが、その後死亡している事実があり、その周辺では今でも多くの住民が白血病やがんなどの後遺症に苦しめられています。

もし、九州で原子力発電所の大事故が起こると四国や中国地方、静岡で起こると関東一円、そしてこれが北海道で起こると東北の北の方まで超危険地帯となり人も住めなくなり、そこでできた食べものも食べられなくなります。今、日本にある原子力発電所を考えると、日本全域が超危険地域になる可能性があります。原子力発電所が目の前にあるから危険、遠いから安心ではないのです。

こんな危険物はつくらない！

これが一番大事なことではないでしょうか。

参考文献：
「原子力発電のない社会をめざして」
グリーンコープ共同体脱原発学習会講演録（広瀬隆さん2010年1月25日開催）
「お金で世界を変える30の方法」合同出版株式会社
田中優+A SEED JAPAN
「原子力発電が抱えたさまざまな危険」　エコ貯金プロジェクト

グリーンコープ共同体組織委員会

投稿欄

言・い・た・い

私の好きなグリーンコープ商品

大満足のこだわりのあらびきウインナー

息子はたまごやミルク、小麦、大豆等々の食物アレルギーがありますが、豚肉、鶏肉は食べることができます。そんな息子の大のお気に入りは「こだわりのあらびきウインナー」です！豚肉のおいしさがギュッとつまっていて、余分な調味料が入っておらず、安心して食べさせることができます。炒めたり、ボイルしたりももちろん美味しいですが、忙しい朝にトースターで焼くだけで、簡単手軽なところもお気に入りです。お弁当、朝食と、あっという間になくなってしまいます。

息子に食べさせてあげられる。それだけでも満足できる商品ですが、味ももちろん大満足できる商品です。ぜひ、お試しください。

他にもアレルギーの息子に安心して食べさせてあげられる商品がたくさんあります。わが家になくてはならないグリーンコープです。

グリーンコープ生協（長崎）
松下　壱佐

投稿募集中

●わが家のエコ
●私の好きなグリーンコープ商品

●400字程度
●〆切 毎月末
●住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード（500円分）進呈。
●住所・氏名などの組合員の個人情報は、本紙に掲載の場合のみ使用します。

※事務所移転にともない住所が変わりました。
〒812-8561
福岡市博多区博多駅前1丁目5-1
カーニープレイス博多4F
グリーンコープコミュニケーションワーカーズ連（REN）
「共生の時代」編集部 宛
FAX　092-481-7876
Eメールアドレス
rikoho@greencoop.or.jp

子育てからスタートする街づくり

いま地域を考える　No.207

パパイヤとバナナが出迎えてくれる子育て支援ルーム☆「きらきら」

宮崎県児湯（こゆ）郡高鍋町は、「日常生活は自転車で事足りる」というコンパクトな町ながら歴史と伝統文化が今も息づいています。その精神風土はこの地に暮らす人々の誇りであり、NPO法人AIの活動にも愛郷心がくっきりと映されています。

2009年、子育て支援を柱にした街づくりをNPO法人AIとして発足させた樫原富子理事長（グリーンコープ生協みやざき組合員）、小野和彦副理事長・事務局長に活動のようすを聞きました。

特定非営利活動法人AI（エーアイ）

小野さんと樫原さん

八面六臂（はちめんろっぴ）の活動を展開

NPO法人名のAI（エーアイ）は、「あい＝愛」をイメージして名づけられた。温かなネーミングと、子育て支援を柱にした「環境に配慮した安心・安全で住み良い元気な街づくり」という理念、そして何より樫原さんの人柄は、高鍋町で困りごとを抱えた人にはとても頼りになる存在。公的なことから私的なことまで「お困りごと」や「相談ごと」が次々と舞い込んでくる。

例えば今年第2回となる高鍋町の「ひまわり迷路」は、地区の農家で構成される協議会とAIとの協同事業だ。350万本のひまわりが咲き乱れる巨大迷路。口蹄疫で疲弊しきった高鍋町の大人や子どもを勇気づけた。また高鍋大師・持田古墳群の案内パンフレットにはボランティアガイドの会としてAIの名前が大きく掲載されている。4世紀から7世紀に成立したと推定される持田古墳群、その慰霊と町民の安全祈願をかけて彫られた高鍋大師の88体もの石像群は高鍋の貴重な文化遺産。石像の制作者である岩田保吉さん（1977年没）を敬愛し、助力を惜しまなかった町の人たちの思いをAIもしっかり受け継ぎ、だからこそのボランティアガイドだ。高鍋大師の彩色の塗り替えイベントも企画した。

またAIのホームページを開くと「たかなべ夕やけ市」の開催情報などもある。街の情報発信基地としてとても頼りにされている。

ベビーマッサージ教室

街づくりは子育てから

一方でAIの日常は地道な子育て支援にある。樫原さんがこうした活動に足を踏み入れたのは、一人息子の保育園入園がきっかけだった。食育を柱にした保育園。食事はだし汁から丁寧に手作りされ、子どもたちに草取り・野菜作りも体験させていた。参観日は「おやつ作り」と徹底していた。こうした姿勢が父母に伝わらないはずがない。参観日は父母の9割近くが参加し、父母が作る「愛情弁当の日」のおかずは、加工食品から次第に手作りに変わっていった。樫原さんはそのさまを目の当たりにする。

だが、子どもが小学校に入ってみると、クラスで同じ保育園卒の子はわずか2～3人。当たり前であったことがそうではなくなる。小学校にもこうした取り組みを投げかけたいと切実に思った。高鍋町から学童クラブの事業委託を受け、今年の4月に高鍋西小の児童クラブ（学童保育）を発足させた。その責任者には息子が通っていた保育園の園長が、AIの思いをくみとって快く引き受けてくれた。いつも絶妙のタイミングでことが運んでいる。児童クラブの子どもたちは、「ひまわり迷路」や「高鍋大師の彩色塗り替え」にはもちろん参加した。

今年2月には就学前の子どもを持つお母さんのサポート施設として「子育て支援ルーム☆きらきら」を開所した。町なかにあり立ち寄りやすい。事務局もこの一角に設けた。日常的に「預かり（託児）」を行い、ベビーマッサージ、パッチワーク、布ナプキン作りなどの講座、また場所はほかへ移すがお母さんのためのヨガ教室なども主宰している。これらの企画は町報にも掲載され、高鍋町の子育て支援事業を一手に引き受けているといっても過言ではない。

「今はまだいろんなメニューを試している状態」と樫原さん。どんな企画がお母さんたちのサポートにつながるか、いつもアンテナを張っている。

こうしたメニューや「預かり」でお母さんたちと言葉を交わすうち、気心も知れ相談を持ちかけられることもよくある。「そういう時こそ自分たちの出番だと思う」と樫原さん、小野さん。どこに繋げば幸せな解決につながるか知恵を絞る。「公的な場に直接家庭内の悩みを持ち込むことはなかなかできない。私たちはその窓口になれればと。ワンクッションおくと案外うまくいくんですよ」。連携力は際立っている。

この街で老いていきたい

樫原さん。結婚する前は介護福祉士として老人介護施設で働いていた。大人であるお年寄りと子どもとでは対応は大きく異なってくる。「子どもを育てているつもりが育てられていると気付いた」という。どのような目線で子どもたちとかかわるか、真剣に悩む。そんな樫原さんを支える小野さんは、「生きがい」を求めて会社員からNPOに転身した。樫原さんの頭の中を整理し、金銭面を含めてさまざまなアイデアを具体的な企画にまとめあげる。

「小さな町ですが、子育てをメインに、これを手伝ってと声がかかれば、即駆けつけたい。最終的に子どもたちが『いい町で育った』と思ってくれれば本望。そしてその子たちがお年寄りの車椅子をごくごく当たり前に押すようになってくれれば…いいですねぇ…」。共通の思いだ。発足して日が浅いものの、AIの夢は明確だ。

ちょっと迷った?ひまわり迷路

2010年９月の組合員数　404175人

（9/27現在）

2010年8月分

リユース リサイクル データ

牛乳びん 回収本数 798,849本 回 収 率 101.0% (7月18日～8月14日回収分)	**リユースびん** 回収本数 190,372本 回 収 率 59.8%
トレー 回収重量 10,467kg 回 収 率 60.0%	**モウルドパック** 回収重量 34,670kg 回 収 率 94.0%
仕分け袋 回収重量 1,302.8kg 回 収 率 7.5%	

フードマイレージ

2010年9月までに組合員の利用によってたまったのは

63,973,122.0 poco

CO_2に換算して6,397トンを削減したことになります

アジア民衆基金

2010年9月までに組合員の利用によってたまったのは

11,834,376円

放射能汚染測定結果報告(203)

2010年8月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値（1ベクレル/kg）以下です。※は、グリーンコープ連合取り扱い商品

	検　体	産　地	セシウム134	セシウム137	合計 ベクレル/kg
	豚飼料（人工乳）		ND	ND	ND
	豚飼料（仔豚用）		ND	ND	ND
	豚飼料（肉豚用）		ND	ND	ND
※	北海道牛	北海道	ND	ND	ND
※	肥後あか牛	熊本県	ND	ND	ND
※	豚肉	福岡県	ND	ND	ND
※	豚肉	宮崎県	ND	ND	ND